The 3rd Summit for Child Mental Development of Kanazawa University

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41235

『学会開催報告』

第３回金沢大学 子どものこころサミット

The 3rd Summit for Child Mental Development of Kanazawa University

子どものこころの発達研究センター
東　田　陽　博

平成26年11月27日(木)，28日(金)，29日(土)，北國新聞赤羽ホール (1階 北國新聞交流ホール) において，約2年半ぶりとなる第3回金沢大学子どものこころサミットが開かれました．

開催までの間，センターの活動としては文部科学省脳科学研究戦略推進プログラムの一環として，金沢大学を代表研究機関に，「神経内分泌仮説に基づく知能障害を有する自閉症スペクトラム障害の診断と治療の展開研究」(代表研究者：東田陽博教授) が順調に展開されている一方で，文部科学省 地域イノベーション戦略支援プログラム「ほくりく健康創造クラスター」，独立行政法人科学技術振興機構 (JST) 戦略的創造研究推進事業「CREST」および「RISTEX」，日本学術振興会 (JSPS)「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」が平成24年度で無事終了いたしました．しかし，平成25年10月から文部科学省の革新的イノベーション創出プログラム (The Center of Innovation；COI STREAM) に採用されました．これは，「今の夢．10年後の常識．新しい未来を作りたい．」というプログラムです．金沢大学は，パナソニック㈱と大阪大学が中心となる「人間力活性化によるスーパー日本人の育成と産業競争力増進/豊かな社会の構築」プログラムのサテライト研究拠点となります．そこでは，「脳の個性を生かした子どもの健やかなこころの育成：特異から得意へのパラダイムシフト」(リーダー：三邉教授) をし拠点のビジョン実現に貢献するため，幼少期から脳の個性を考慮し，人間力を伸ばすシステムを開発します．日本で唯一の幼児用脳磁図計 (脳センシング技術) を活用し，脳科学的観点から，「子どもの健やかなこころの育成を実現する．」を研究する大型プロジェクトが立ち上がっています．また，子どものこころの発達研究センターが，4年間の時限付事業から，2年前に金沢大学の持続的研究組織に移行している事からも，子どものこころの発達研究センターと連合大学院小児発達学研究科金沢校は金沢大学に根を下ろした格好となりました．

このような子どものこころをめぐる諸困難の解明をめざす本センターの着実な歩みをバックにして，今回3日間サミットを開きました．今回のプログラムの特徴は，「新しい未来に向けて」でした．脳機能計測による発達障害診断技術開発，オキシトシン作用機序の最先端研究とオキシトシンによる自閉症治療の臨床研究や研究倫理などを取り上げました．当センターは約10年前にスタートさせたオキシトシンの研究に特徴があります．自閉症スペクトラム障害に共通な社会性障害がオキシトシンの異常により生じている事や，治療薬であるオキシトシンは，人と人が結びつく上で必須の物質となる可能性があり，このような状況の現状報告，金沢大学での研究，組織のあり方や新しい方向性を見出す機会となりました．

3日間の参加者は210名にのぼり，30題の講演が行われ活発な質疑応答が交わされるサミットとなりました．

第1日目は，子どものこころの発達研究センター相互認識基礎部門のテーマであるCD38とNAD分子の生理・精神作用について，国内の研究者に加え，多くの海外の研究者を招いた英語による講演が行われました．それぞれの専門的立場から講演していただき，CD38等NAD代謝の医学生物学的意義に関する，自閉症を含めた広い分野での役割を理解する有意義な相互理解が得られました．

第2日目は，午前の部で当センターの研究者による最近の研究報告，午後の部では自閉症スペクトラムを対象としたオキシトシン臨床試験に関わる研究者を交えて，その臨床試験の現状や様々な立場からのオキシトシンの働きや，自閉症へのアプローチについての講演がなされました．オキシトシンの作用に関心を持つ市民にも理解しやすい切り口の演題が多く，一般の聴講者が最も多く来られました．自閉症スペクトラム，社会性の障害が身近なものとして関心を持たれ，情報を求める人が多くなっていると感じられました．

第3日目の午前の講演では，精神疾患のゲノム・遺伝子解析とその医療倫理をテーマに，様々な疾病の遺伝子ゲノム解析が進む中で，精神疾患と遺伝子との関連，その頻度や，最終的に疾患に特異的な行動という症状への影響，更にインフォームド・コンセントのあり方まで，研究者としての倫理に関わる取り組みについての講演がなされました．実際に患者に接する臨床現場にいる研究者にとっても，改めて研究倫理について確認する事の出来る良い機会を得られたと思います．午後は，江頭基様(文部科学省) のCOIプログラムについての特別講演の後，脳磁計 (MEG) を用いた自閉症スペクトラム幼児の画像診断をはじめとして，脳や体の状態をモニタリングし，診断や研究に役立てるセンサーを用いている研究者の講演が行われました．言語能力，コミュニケーション能力，情動など，従来は客観的な数値として測定する事が困難であったものについて，測定結果とその解析及び今後の展望などが講演されました．

最後になりますが，十全医学会をはじめ，北國新聞社及び金沢コンベンションビューローのサポートにより活気あるサミットを開催する事ができました．この場を借りてお礼申し上げます．(講演内容はセンターのホームページからネットでみる事が出来ます．)



